

# 小栗判官論の計画

「餓鬼阿弥蘇生譚」終篇

折口信夫

青空文庫



神道集の諏訪本地。

信濃念仏。

安曇の蹶抜き伝説。

文字から読んだ時代。

泉小太郎——白水郎。

海中と、山中の深穴と。

おほくにぬし・すきのを・すせり媛の比良坂。

数種の比礼と、四季の国々と。

禊ぎと、黄泉と。

いざなぎと、甲賀三郎と。

伊吹山と、地獄谷伝説と。

甲賀人の宗教。

湖水を中心とした宗教。

禊ぎと、ゆかはと。

出雲国造の湯と、大汝と。

いざなぎ・いざなみと、近江の国と。

多賀・日稚宮

なぎ・なみは、大汝のすせり救脱と同じか。

甲賀形身解脱の水を仏徳に帰する。

熊野念仏譚は、出雲出自のものもある。浴湯蘇生は、是だ。

甲賀——蛇身。

あぢすき・ほむち・允恭——不具（游魂）。

小栗——肉身変替。

幼神・不具身の為の湯。

湯の水を汲む女。

男（山路・百合若等）<sup>サンロ</sup>。

当麻の地名。

東海道の順送りは、当時の風習をとり込んだので、古くは、熊野まで送ったのか。

小栗と、甕勝五郎と。

照天と、初花と。

熊野と、箱根と。

姫の私通（他国の男と）と、追放と。

魂があると、出来るからだ。からだがあると、這入る魂。

大嘗殿の御倉。

癒合させる齋水湯の力。

その前提としての他界廻り。

大汝のよみの話は、国造禊ぎの物語だ。

きさがひ。

「きさげ集」は、骨・寸法の木その他の分子を集めて、組み立てるのか。

きさり持ち・滝の上・象山・小川・きさの地名。

小栗は、湖・海の禊ぎを、山の齋水に移した物語だ。

熊野川から来た、不具神の旅路。

念仏聖の旅路に応じて、その出処が、遠く信者の多い東の果にうつされたのだ。

中心地も、相摸川の中流地となる。

神の国から来た不具神を育てた巫女、中将姫の物語が、てるて姫を作った。  
中将姫・うつぼなどの伝説型の錯綜。

幼い神と、貴女と（継母と、神育て人）。

てるて——てるひ、巫女の名。

読み違へ。

紀州雲雀山。

熊野神明の巫女。

中将姫物語を伝へた比丘尼。

朝日の本尊。

比丘尼の色づとめの本縁談など。

歌念仏の中将姫と、布を織る棚機つ女と。

神明巫女としての狂ひ姿。

淑女放逐談。

夫父らの遇逢。

父兄の折檻。すさのを以来。

美濃の照日の巫女。

巫女の語りと、聖・盲法師の語りとの融合した物が、小栗・照天を一つにしたか。

人買ひ話。転買。

やきがね責め。

水汲み——立ち使ひ。

長者。千軒村。

日限りの略と。聖役と。

近江八景の問題。

玉屋が門。

宿のあるじ。

東海道と、王子順路と。

俊徳海道と、神幸順路の特定と。

馬の家としての常陸小栗氏。

馬の神としての神明（観音）。その巫女。

小栗の称。小栗家の先祖の物語を語る宣命。

鬼鹿毛談。

人喰ひ馬。

あいぬの小栗談。

あいぬへの進入——えぞ淨るりの性質。

嫁とり。

馬乗りこなしの後は、別。

嫁とりと、よみの国と。

よみの国と、禊ぎの斎水。

巫女の物語の添加。

横山は、馬主。小栗は、英雄。照天は、馬主の娘。

念仏修者の不思議な蘇生。

死に方を語る物語の、当麻において離合。

上野原の地。

東のはて——常陸——馬術の家の名に、小栗のつく理由。

嫁とりの話に結んだ、当麻物語。

逐はれた姫の話。

馬の宣命——盲僧。

照日の巫女の神明布教。女の懺悔——中将姫。

時衆念仏開基の地と、巫女の物語と。

命数残った地獄返りの人の話。

精霊ほめの物語。蘇生を語る歌念仏。

馬の宣命は、変形した。

藤沢寺縁起に入つて後、いろ／＼の聯想が絡んだのだらう。寺のは、地獄と、上野原と、

熊野位に、巫女の名から出た照天姫を挿入した位だつたらう。

徳川家の聖時代。

聖の形の野伏し群と、少数の遊行聖と。

朝夷巡島記・御曹司島渡り系統に、東国の牧馬地方で、馬の試みの這入つたもの。

小栗にも、馬乗りしづめ法を、照天から授つたのだらう。

十郎姫と、照天姫と。

島々や天竺と、下界とでは、島々は新しく、下界が古い。

照天は下界に居なかつたけれど、死んだ形をした。その上、様々の苦勞、国巡りは、下界の形だ。

男の救ひ出す形よりも、女に育てられる形が、主となつた。

甲賀三郎より複合多く、近代的だ。

人の姿を、動物その他に変形する術と、異形身と。

建御名方の立ち氷の如くなつたのは、異形身で、蝮虎杖花の如くなつたのだ。蘇生の為。諏訪の湖に裸ぎして、蝮の身虎杖花の形から脱して、そこに、棲みついたのだ。

甲賀三郎の前型にも、呪はれて、蝮の如く、虎杖花の如くなつたのが、近江の湖水で直つた。其が、東へ移つて、信濃に残つた。更に進んで、蛇身になる。水辺の女や、水神へ嫁入りの娘の話となつた。

小栗も亦、元は現身霊を保持する身を失うて、異形身を得てゐた。其が、身を失うた餓鬼といふ事になつたのだ。熊野から、大和当麻に、又、箱根に移り、近江にも關係を持ち、又、相摸川にも移つたのだ。

当麻と水と關係の勘いのは、後入故か。

箱根の話が、相摸川の話と關係あることは勿論、此方が古い様だ。初花の名も、歌念仏

に關係あらう。

小栗の毒飼ひは、食物による異形身の説明である。

小栗も蛇身に關係あるは、神泉苑の蛇と契つた為の流離だ。

此は、本筋に關係のなさうな古い形の物語である。

其と共に、馬術を得たのだ。こゝに蛇身の形が見える。

蛇身の女と契ることは、水の女の記事にも關係がある。

小栗では、下界談は短い。現世における異形持続・遠路巡遊に變つてゐる。

常陸小萩の名と、奴隸と。

小枝・小萩・中将・少将・桂姫・初花・安寿・きく丸などの出自。

袖萩・小萩の名の固定と、女被官の通称。実名の唱へ替への源。采女。

八束小脛と、舎人生活と。都方に仕へた風の印象（狐飛脚の死）。他郷異形の者と見るか。

常陸・尾張両小萩とも、やきがね攻めにあふのは、奴隸のしるしをつけたのだ。同時に、八束小脛の翼なども、遁走を避ける為の筋や、踝の辺に、細工したなごりであらう。えだを下女とし、えたとするのも、えたにしるしをつけた風習の後か。

かたる（かたるぎり、か）なども、筋を抜かれて、居るに両足を組まぬからの名で、奴隷の名だつたか。骨足らず・四つ足（四つ）などいふのも、其か。

ぼろんじのぼろも、よぼろの略か。為朝の筋を抜いた話も、其だ。

安寿その他の中世の宗教名よりも、小萩は古い。

とつば・すつばは、とらへはぎ・すりはぎなどで、剥ぎだらうが、脛の聯想がありさうだ。

腰行の風も、其か。

横佩大臣のはきなども、さうした聯想から出て、豊成にくつゝいたのだらう。萩の花及びえだには、折るよりも、よづを多く使ふのは、此聯想を避けたのか。よはぎと訓むべきなのかも知れぬ。

をりも同様、是に關すること、をろがむも、其。織オリに通じて、後世、何織・織何といふ名が多い。扇をり・小萩などは、其倂を見せてゐる。織女の聯想ではない。よをりのをりも、折り伏して、齡を奉る義か。たよは臙オリのよで、よを折つての義だ。五節も、五節折の折を避けたのだらう。脚の臙を五度折つて、鎮魂の義を奏する事らしい。

太陽井の話。井水の汲み難い平野地の話から、海岸水辺の物語に移るのだ。安寿の汐汲

みなどは、後だ。

播磨風土記の萩原里は、萩井原の里の筈であつた。一夜、萩に絡んで、処女の死んだ話が、伴うてゐる。

「萩が花妻」も、古語だが、小脛の女の聯想で、女の奴婢の、色を以て仕へた処から出た語で、後には、唯の萩となり、鹿の配偶の様に考へられる事になつたらう。

廻りあうても知らぬのは、異形身だけでなく、よみの所屬の人を連れる事の出来ぬ為だ。健児なども、こむらびなどではないか。字音としては、過ぎる。

ひかゞみなども、びつこの語原らしい。臍の筋を抜くからである。「朝妻のひかのをさか」などいふのも、ひかゞみから、をさを引き出すので、をさは足自由でなく、坐て用を足す者を言ふのである。「朝妻」は婢なるが故に、家にゐさせて、朝までもまく故であらう。井光井シカの「ひか」も、其らしい。ひかの音転がひなで、夷の住居地方に当る。とねりは、をさと同じ語原のとね即、外根からの刀禰と、「折り」か「坐ヲり」の融合したものらしい。采女は采女部の義で、うねは、内刀自で、内舎人の古い形なのだらう。はやひとは、駄使丁としての名で、早足の人であらう。隼は、宛て字だらう。ひとのとは、足くびから下を斥すか。神の用の脚夫で、神聖（ひ）な足の所有者であるらしい。隼人

は、速足の聖奴の義らしい。寺人・神人皆奴婢の意を含んだ語である。海人部アマヒト・山人部ヤマヒトも、其だ。駄使丁を宮中に用ゐるのは、速脚を利用したのである。

男子の丁にも、はぎの名はあつたらうが、女の方に主にはぎ・小はぎを使うのだらう。はぎを加工するのは、殊に、野蛮な種族らしく、八束脛などが、山人の類に入つてゐる。「またく心を脛にあげて」・「ほやのいずし……はぎにあげて」なども、多少さうした奴婢の隠し処の聯想があつて、趣向となつたのである。

あきはぎとあきをつけるのも、聯想を避けたのであらう。はくは、脛の動詞化である。佩とは、別の語である。上肢、下肢を通す事である。どうしても、性の聯想があるのである。かう言ふさしぬきにしてつける袴（穿く裳でなく、絡佩裳ハクモである）を、奴袴と書くも、故がある。むかばきは、向佩きである。ばきの簡單化したもので、向ばきと、古いほど似て来る。脛に密着させるものは、筒袴とも言ふべきである。此が新しい意のはぐで、襲衣上袴裳オスヒモだ。此は袴を括り上げる。脛ばきのはぐきの原形は、此である。はぐきの裾の下肢を括る処ばかりに作つた脚絆を、はぐきといふ様になつて、さしぬきと改名した。

「脛にあげて」も、裾をまくり上げて、上肢の陰し処に近くからげるのだ。

常は、丁・丁女が、素足を隠すからだ。「はゞき裳」が、此であつて、下裳の上の表裳だから、おすひ裳である。ひもは、ひもの緒の略らしい。正しくは、ひものをである。

ひれ・ひらみ・褶を通用するのを見ると、頸越しに、爪先よりも長く垂れたので、ひらおびとするのは、後の民間語原説である。みは裳であらう。ひれ・ひらは、ひかゞみから出たひなの転のひらであらう。ひらみが、ひれになつてゐるのだ。ひれふすのひれも平ではない。鰭も、はたの先をいふのである。

向ばきは元、前だけ掩うたからか。「向脛に……」は此から出たか。早処女の前を示さぬ様らしい。此が後に、ひらみとなる。

「ひれかくる伴の緒」といふのは、采女・舎人・隼人等を斥したのである。舎人は、武官となつて、ひれを、形式にもつけなくなつたのだ。襲衣から分れぬ先のひれは、襲衣その物で、頭から被つて、前身を隠す様に垂れたのだ。だから殆、裸体である。槻の葉の散つたといふのは、実は、襲衣に「月経」<sup>ツキ</sup>のついてゐる事を歌うたのだ。誤解である。やまとたけると雄略とでは、こんなに違つて来たのだ。

槻の木は、月経その他の場合にこもる、つきごもり（晦日の語原）の屋の辺に立つてゐたのだ。斎槻も其だ。「長谷のゆつきの下に」つまを隠すといふのも、槻屋に籠らした

のだ。物忌みの為の、別屋である。月経を以て、神の召されるしと見なして、月一度、槻の斎屋に籠らしたのだ。

神まつる屋は、すべて槻その他の木の下に作つた。こゝに月経の日を仕へるのを忘れて、月経の日に、忌みに籠る屋の様に考へたのだ。

月のはじめは、高級巫女の「つきのもの」の見えた日を以てした。月の発つ日で、同時に此が「つきたち」である。神の来る日が、元旦であり、縮つては、朔日であると考へた。

「はしり出」は、はしり出居で、戸を全部閉ぢた様にした、出居である。神迎へに出居る屋で、其上には、槻の木があつたのだ。昔の歌に、槻の歌の多いのは、槻屋の印象である。

「はなち出」は、戸ぎしのない出居である。

「月読めばいまだ宵なり」・「この月ばかり」など、つきといふ語には、聯想が多かつたのである。「月たちてまだ三日月の眉根かき」なども、三日月眉をいふのは、後世の技巧で、下には、古い修辭法「月経の日からまだ三日」といふ義を含んで、「眉根かき」が利くのだ。

「天ゆく月を綱にさし」も、月の蓋の外に、巫女の月ごもりなるものを、此新室の葛根もてする如く徴<sup>サ</sup>して、おのが者として、かづき臥し給ふといふので、床入り際の歌である。恐らく、皇子尊の新婚の棲屋の歌であらう。

業平の歌の「まだきも月のかくるゝか」にも、此風は廃れても、宴会の正座の人の床入りには、月を以て祝する風を、伝へてゐたのである。

「国栄えむと月は照るらし」も、転じて、殿ほぎに月を出したので、此夜は、主上・高級巫女同床せられるのだ。此日寓る御子を、神の子として、日つぎの御子の一人とせられるのだ。

殿は、安<sup>ヤスミドノ</sup>殿である。此日の行事を、神として、神女と、「やすみ（しゝ）せず」といふ。神事の最上であつて、神として、地上に暫し止りたまふ義である。平安朝の御息所は、御子を生んだ為、みやすみ所に侍り得るものとしたのだ。安殿は、寢殿即正殿である。後に清涼殿が、其となつた。

寝ることのやすむは、だから、およるなどの古い時代から残つたのだ。「安寝」は条件として、同床がある。安見子は、采女の名でなく、古くから、御息所の素地が出来てゐたことを示す語で、天子の、一度倅せられた女子を言うたのだ。村上の中宮を安子とい

ふのは、既に「やすむ」の語義を忘れた為か、或は普通名詞の「やすみ」子を、中宮にも用ゐてゐたのか。

月読命の大食津媛を殺したのも、月はまれびとだからだ。

すさのをの場合は、阿波に下つたのだ。

保食神が、牲をつきの血でけがしたのだらう。

安殿皇子の平城帝も、あででなく、やすみどのの皇子として、御湯殿に対する名の最後らしい。

「やす」といふ語根は、神の降り留る義で、八十といふ語には、その聯想が伴ふのである。其から、神事の人々の数を数へるのに使ふ。崇神紀の八十伴緒・八十物部・八十神などが古い。神の来てゐる間の、接待者の状態を言ふ様になつては、瘦すとなり、やせうからの転のせがれが、やつがれとも、せがれともなる。

八瀬の里人は、このやせの語意から考へられたらしい。地方神事に「おやせ」といふのが出るのも、此だ。やつる・やつすのやつも、此転音である。やつこも、家つ子と言ふより、此やす子かも知れぬ。瘦男の細男と、聯想のあるのも此だ。やしよめも、八瀬女でなければ、やせよめである。神事に与る善女ヨメであつて、桂あたりの販婦である。

安来・野洲川・八十橋など、皆神天降を言ふらしい。八十橋などは、天八十人をいふのは、合理的である。安井も天降井である。

やすはふやすなど、関聯して考へられてゐる。性的神事だからである。

やしなふも、此か。神を湯・乳・飯で、居させ育み奉るのである。

安御食・安みてぐらには、増殖の義があるのだらう。埴安池・埴安彦などの名義は、土を水でやしなひ置くと共に、国土が拡がると見たのだ。埴安池の土を取つて、此を様々の象徴に作れば、当方が勝つ。埴安彦も其で、此を亡して、倭宮廷の力が増した。

やす・やすら・やすむは、客神の新室に居てゑらく満悦の辞である。寿詞にも、其状を予期して祝する。

「うらやす《心安》の国」は、国ぼめの語で、八十島・八十国は、祝福を籠めていふのだ。大八洲も、やしの音に、よい語感があるのだ。

「やさし」は、瘦の形容詞でなく、客神に対して、心和いだ様をいひ、又自ら来臨を迎へ恥づる両義がある。

つくも髪は、産屋髪で、物忌みの髪形だ。経喪髪ツクモである。倅に見ゆの序で、慣用から来た誤解であらう。かげ（蘿）にかけてゐた。日かげのかづらをかけるからである。百年

に一年足らぬとは、つくもの枕詞ではない。だから当然九十九の意ではない（百は違ふ。つゞで十九或は、九十九か）。百年に満ちて亡びるのでなく、常に一年足らず伸びゆく、此槻の屋のつくも草を葺いた新屋の中の、月忌髪 of 巫女の頭の日蘿ではないが、彼の人、我に焦れてゐるに違ひない。幻に現れたといふのだ。

つくもには、采女・巫女たちの神室の作物<sup>ツクモ</sup>する髪を言うたのか。

熊野と、出雲と。

常世と、死の島と。

死人の三山詣り。

妙室山。

死者蘇生の地。

霊の寄集地。

檜の一本花を持参。女になつた証拠。

鉛山。

峰の湯・海際の湯。

をち水求めの天子。

王子詣で。馴子舞。

東海道を説くのは、王子巡拝の最初を示すのだ。

其は、王子齋祀の地点定まらぬ、昔を語るのが元だ。三島郡の小栗の社。

車引き。景事全盛時代の色あげ。

熊野参詣道中の歌。

千引き系統の恋人に牽かれる話の種。万屋の門で動かなくなつたのだ。

千引きの巫女姿。

木やり・石挽き・たゝら唄・どうづき唄。

石挽きと、穴太役と。六条・名越と、たゝら踊りと。

仏体勧進・仏像鑄造・開眼供養。

御手・御胴勧進の仏曳き。

来世を見て来た人の信仰。

来世から生れ替つて来た鳥・獣・人間の因果話。

来世話をする異形の病人。

此に代つて、物語る因果物師。

大和詞。

浄るり十二段系統。

歌占巫女の語彙。

歌比丘尼の艶書代筆。

藤沢寺。

大草紙の新しい書き入れ。

念仏を離れて、説経へ。

本地物の古態。

初段、貴種流離の原因。

最後は人間として、栄える。

まだ、説経化しきらぬ物。

巫女祭文（山伏の手を通らぬ）。

盲僧の説経。

神事舞ひの宣命。

厩ぼめ及び示威。

後には、馬おさへを忘れて了ひ、巫女祭文の色濃くなる。

東国の人の物語からはじまった。其後、熊野や藤沢がついてゐる。

念仏聖・神明巫女・歌比丘尼の熊野代参懲憑。

当麻（小本掬）藤沢から——熊野（大本掬）へ。

融通念仏・時衆念仏の差。

念仏踊りの屋敷ぼめ・厩ぼめ。

因果物語附著。

藤沢縁起。念仏功德。

武士発心譚の系統。懺悔物。

熊谷・教信……。

ひいき多い判官の名称。

悲運の武士と、後に残る女性。比丘尼のざんげ。

（小栗）

「万歳↓山伏

1 馬宣命——神事舞ひト幸若

「盲僧

(照天)

2 巫女祭文——(神明)

大和当麻縁起。

3 当麻の無量光院開基。

(念仏聖)

時衆の妻としての照日(親鸞の妻)。

妻は巫女。夫は神。

←

妻は憑尸。夫は審神者。

←

「歌念仏

「念仏

妻はト浄るり

夫はト

「歌説経

「説経

4 熊野参詣。功德唱導。

5 王子の本縁。

6 藤沢寺縁起。

7 支那小説の翻案（水滸伝）。



# 青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 3」中央公論社

1995（平成7）年4月10日初版発行

底本の親本：「『古代研究』第一部 民俗学篇第二」大岡山書店

1930（昭和5）年6月20日

初出：「民族 第四卷第三号」

1929（昭和4）年4月

※底本の題名の下に書かれている「昭和四年四月「民族」第四卷第三号」はファイル末の「初出」欄に移しました

※複数行にかかる中括弧には、けい線素片をあてました。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2007年4月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 小栗判官論の計画

## 「餓鬼阿弥蘇生譚」終篇

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 折口信夫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>